

大学生のパーソナリティ特性が音楽評価に及ぼす影響

新山真弓* 野本立人** 浅川潔司***

(平成14年10月30日受理)

A Study of Effects of Personality on Music Evaluation in College Students

Mayumi NIIYAMA Tatsuhito NOMOTO Kiyoshi ASAKAWA

The present research was designed to investigate the relationship between personality and music evaluation in college students. Twenty-four male students and 45 female students participated in the study. The TEG (Tokyo University Ego-Gram) was used for the measurement of characteristics of personality and social behaviors in students. Students' music evaluation was measured using the Iwashita (1979)'s Inventory of Music Impression (IMI). Participants were asked to response those questionnaires after their listening well-tempered clavier vol.1-1 (Bach, J.S.). The main findings were as follows;

- 1) As results from factor analysis of the IMI, four interpretable factors were elicited; that is brightness, tension, gracefulness and affiliation.
- 2) In general, Female group made more positive evaluations of music than male group.
- 3) Some aspects of personality related to child's ego states affected on the evaluation of tension-relax and gracefulness.

Those findings were discussed from viewpoints of music educational psychology.

Keywords: Personality, States of ego, College students, Evaluation of music

問題および目的

本研究は大学生がいわゆるクラシック音楽に対してどのような印象や評価を形成するのか、そしてそのような心理過程に個人のパーソナリティの特徴がどのように影響を及ぼすのかといった点に焦点化して検討がなされたものである。

われわれは音楽と日常生活の中で頻繁に接触し、親しんでいる。時には音楽の受信者になるばかりではなく、その道の専門家でなくとも発信者にもなることもしばしばあると波多野 (1972) はいう。

確かに音楽は日常的に私たちの環境を構成する身近な側面といってよいし、それを発信することで自己を表現し、周囲とコミュニケーションを図り、自らを安定させることは周知の事実でもある。

しかしながら 1970 年代に至るまで、音楽行動に関する組織的、系統的な心理学研究は必ずしも十分になされ

てきたわけではなかった。当時の状況を省みて、日常化している音楽行動をほとんど無視するのは、全般的な人間理解をする上で好ましくないと波多野 (1972) は述べている。

さらに当時の音楽行動についての研究を概観した波多野 (1972) は、研究の多くが構造的な側面に偏っていることを指摘した後、爾後においては、どのような文脈で音楽行動が生じるのか、それが個人によって如何に利用され、いかなる満足をもたらすのか等の機能的側面に關心を払う必要性を説き、将来にわたるこの領域の研究指針を示している。

1980 年代に入ると、音楽行動に関するわが国の研究は増加し、構造的な側面に加えて機能的な面での研究も拡大して、コンピューター科学や認知的あるいは発達的な観点からの研究も含めて、新しい音楽研究を目指す活動が幅広く認められるようになった (星野、1987)。

* 兵庫教育大学学校教育学部 附属実技教育研究指導センター (音楽教育分野)

** 兵庫教育大学学校教育学部 芸術系コース (音楽分野)

*** 兵庫教育大学学校教育学部 教育臨床心理学コース

音楽行動研究の新たな動向の1つに音楽療法が加わってきたのもこの時期であり、自閉症などの発達障害を有する幼児や児童に対する研究（たとえば、吉野・戸田、1982）に加えて、喘息児に腹式呼吸を導入する試みでなされた演奏療法の報告（館野・鈴木、1981）もある。そして、その後も音楽療法についての研究領域は拡大し、研究論文や実践報告は着々と増加していったのであった（松井、1995）。

音楽療法は、音楽の持つ生理的、心理的、社会的働きを、心身の障害の回復、機能の改善に向けて、意図的、計画的に活用して行われる治療技法と定義されている（松井、1995）。

この定義に基づいて音楽療法の効果性について言及した松井（1995）は音楽の直接的な治療効果だけではなく、治療者が音楽療法に立ち向かう姿勢や音楽の活用の仕方、集団力動などが複合的に作用して効果を生じせしめているという。

このことは、セラピー場面においては音楽そのものが治療的効果を持つことは当然にしても、音楽療法は音楽のみに依存するのではなく、それを導入するセラピスト抜きには成立しないことを示唆している。音楽を十分に理解し、さらに心理療法家としての熟達した技術や知識があって本来の音楽療法が可能になると考えることは妥当であろう。

音楽を演奏し構成し鑑賞するなどの行動においても、音楽が肯定的な影響を個人に与えることは一般的に理解されている。この種の音楽行動が音楽療法として認識されるためには、療法者が対象者の持つ問題を認識し、治療目標を設定し構造化を図ること、そして用いるべき技法を明確にし、選択すべき音楽の特徴や効果性についての知識を有する必要があるといわれる（松井、1995）。

この文脈においては、これまでに開発されたさまざまな心理的療法に熟達した上で、音楽を心理療法展開の効果的材料や媒体として活用することが音楽療法に関する研究をさらに進展させるといえる。

ところで、音楽療法への基本的アプローチとして、人間は音楽をどのように受け止めるのか、そして音楽の認知や印象形成はパーソナリティや心理状態によっても異なるのかといった問題に焦点化した研究がある。

たとえば、前者の場合、小学校2、4、6年生および中学校2年生を対象にSD法によって、異なるジャンルの5曲について、その聴取に際して抱く情緒的印象を発達的に検討した研究（石橋・丹野、1983）である。その結果によれば、曲によって情緒的印象には差異が生じること、その傾向は学年群によっても異なることが報告されている。

音楽についての印象形成とパーソナリティの関係について研究は相対的に少なく、音楽学部学生のパーソナリ

ティ特性についての研究（桜林・八木、1984）や林・高野・柴（1983）による音楽聴取時の印象形成に及ぼす聴取者のパーソナリティ特性の影響についての研究が散見されるばかりである。

従来の研究を概観すると、近年において音楽療法に関する研究は増加しているが、その基本となる教育的・心理学的研究は比較的少ない。とくに、個人変数としてのパーソナリティ特性とその影響を扱った研究は希少である。

これらの事実は、基礎的研究の蓄積に先行して応用分野の研究が進行していることを示している。そこで本研究では、大学生を対象にTEG（東大式エゴグラム）に反映されたパーソナリティ特性がクラシック音楽の聴取後の印象形成にどのような影響を及ぼすのかを検討することとした。

方 法

調査協力者：近畿圏の教員養成系大学学部1年次生108名が音楽評価尺度の予備調査に協力者として参加した。そのうち2回の調査に協力した69名（男性24名、女性45名）が本研究の分析対象者となった。

材料：本研究に協力した学生が聴取した楽曲は2曲であった。すなわち、バッハ（Bach, J. S.）による平均律第一巻、第一集（Well-Tempered Clavier Vol. 1-1、ビクタークラシック名盤コレクション、解説：西村弘治）の中の、平均律1番(1)のプレリュード（ハ長調）と(8)のプレリュード（変ト短調）である。

長調と短調の曲では、その印象や評価に差が生じるとは一般的な見解である。本研究で異なる調性の楽曲を鑑賞曲に選定したのは、個人のパーソナリティ特徴を考えた時にこのような一般的な見解が当てはまるかどうかといった問題にアプローチすることが主な目的であったからである。

鑑賞曲にバッハの曲が選択されたのは、彼の作品は人間の思想や心理体験が豊かに表現されているとされるからであり、ここで用いた第一巻第一集は最もポピュラーで編曲数も多いという特徴を有しているからであった。また、ピアノ曲を選定したのは、この楽器が一般的で学生にとって日ごろからなじみ深いものであることによる。

質問紙：東大式エゴグラムと音楽評価尺度

個人のパーソナリティの測定には東大式エゴグラム（TEG）が採用された。この心理テストは交流分析に基づいて作成されたものであり、十分な信頼性と妥当性を備えていた。これらの点で、個人の心の動きともいえる自我状態の検討が可能な測定具といえる。

TEGを用いたのは、上述した理由に加えて、個人の精神的な正常・異常を判別するものではなく、自己分析の手段として研究協力者にその結果を還元できると考えた

からでもあった。

音楽を聴取後の評価や印象の測定には、岩下 (1979) が開発した評定尺度の因子分析結果を参考にして、その縮小版が構成されて用いられた。

この尺度は本来音楽の評定のために開発されたもので5因子49項目から構成されていた。本研究では岩下 (1979) の因子分析結果にしたがって、5つの下位尺度においてそれぞれ因子負荷量が上位のものから5項目が選択されて合計25項目からなる音楽評定尺度が再構成された。

各研究協力者に対しては、上記の項目に4件法で回答するよう求められた

手続き：CDによる音楽の鑑賞と2種類の質問紙への回答は講義時間を利用して集団場で2回にわたって行われた。1回目の調査においては、バッハのハ長調のプレリュードを聞いた後に調査協力者に対して、TEGと音楽評定尺度への回答が求められた。

調査2回目では、変ト短調のプレリュードを鑑賞した後に音楽評定尺度への回答が協力者に対して要請された。

なお、調査の実施にあたって、曲の提示と質問紙への回答に関する注意と教示は音楽を専門とする研究者の一人がおこなった。

結果 および 考察

本研究の手続きに従って得られた音楽評定尺度の反応に基づいて因子分析 (主因子解-バリマックス回転) が実施された。その結果は表1に示したとおりであるが、固有値の変動等を検討して、解釈可能な4因子が抽出された。

第1因子には「陽気な-沈んだ」、「明るい-暗い」、「明朗な-哀調を帯びた」等の内容 (6項目) が含まれ、朗らかさや晴れやかさに深く関わるために明るさ (Brightness) の因子と命名された。

一方、「激しい-穏やかな」、「張りつめた-ゆったりした」等の6項目が含まれる第2因子には、刺激や緊迫した心情に関する項目から構成されており、緊張-リラックス (Tension-Relax) 因子と解釈された。なおこの下位尺度で低得点であるほど、リラックス度が強いことを示している。

さらに、第3因子は、「高尚な-俗っぽい」、「美しい-醜い」や「優雅な-がさつな」といった7項目から構成されていた。そこで第3因子は優美さ (Gracefulness) の因子と命名された。

最後に、親和性 (Affiliation) 因子と解釈された第4因子には、「好き-嫌い」や「親しみやすい-親みにくい」等の3項目が含まれることがわかった。

TABLE 1 音楽評定尺度の因子分析結果 (主因子解-バリマックス回転)

| | 第1因子 明るさ | 第2因子 緊張性 | 第3因子 優美さ | 第4因子 親和性 |
|-------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 13. ホットな-クールな | 0.428 | | | |
| 14. うきうきした-しみじみした | 0.695 | | | |
| 15. 陽気な-沈んだ | 0.852 | | | |
| 16. 明るい-暗い | 0.819 | | | |
| 17. 晴れやかな-愁いを帯びた | 0.742 | | | |
| 18. 明朗な-哀調を帯びた | 0.825 | | | |
| 19. ユーモラスな-きまじめな | 0.573 | | | 0.369 |
| 20. おどけた-深刻な | 0.706 | | | |
| 6. 緊迫した-のどかな | | 0.634 | | |
| 7. はげしい-おだやかな | | 0.847 | | |
| 8. かたい-やわらかい | 0.371 | 0.582 | | |
| 9. はりつめた-ゆったりした | | 0.779 | | |
| 10. 男性的な-女性的な | 0.322 | 0.437 | | |
| 11. にぎやかな-落ち着いた | 0.392 | 0.551 | | |
| 4. 上品な-下品な | | | 0.392 | |
| 5. しゃれた-やぼったい | | | 0.502 | |
| 21. 優雅な-がさつな | | | 0.595 | |
| 22. 美しい-醜い | | | 0.620 | 0.377 |
| 23. 深みのある-薄っぺらい | 0.352 | | 0.470 | |
| 24. 高尚な-俗っぽい | | | 0.665 | |
| 25. 知性的-知性を欠いた | | | 0.507 | |
| 1. 好き-嫌い | | | -0.310 | 0.789 |
| 2. 親しみやすい-親みにくい | | | | 0.737 |
| 3. 好ましい-いやらしい | | | -0.328 | 0.451 |
| 12. 動的な-静的な | 0.447 | 0.417 | | |
| 平方和 | 7.146 | 3.332 | 1.861 | 0.925 |
| 累積% | 28.583 | 41.909 | 49.355 | 53.055 |

因子負荷量が .300 未満は省略

TABLE 1 の結果に基づき、4つの下位尺度で性別および自我状態の水準ごとに、2種類の作品を鑑賞した後の評価得点の平均とS.D.が算出され、整理された。

TEGは5種類の下位尺度から構成されている。すなわち、懲罰的である一方で良心や責任あるいは倫理観も機能するCP (Critical Parent、批判的な親)、思いやりや保護、受容といった母親役割に近いが一方では、相手の自律や独立を抑制しかねないNP (Nurturing Parent、養育的な親)、そして合理的な現実主義とも考えられるA (Adult、大人の自我状態)である。さらに、自由奔放で明るく創造性に富むFC (Free Child、自由な子ども)と周囲に気を使いよい子を演じながらも、時には主体性を欠くAC (Adapted Child、順応した子ども)の5種類である。本研究ではこれら5種類の自我状態の得点によって、調査協力者を上位群(H群)と下位群(L群)に割り当てた。なお上位群と下位群の分類にあたっては、末松・野村・和田(1995)の資料に基づき、男女それぞれで50パーセント以上の得点者を上位群に、他を下位群とした。

各自我状態のカテゴリーにおいて、性別および鑑賞曲別に音楽評価尺度の下位尺度ごとの平均評価得点とS.D.が算出された。これらの結果を整理したものがTABLE 2～TABLE 6である。

なお、音楽評価尺度の「明るさ」因子の得点範囲は8～32点であり、緊張因子の場合は6～24点であった。また、優美さ因子での得点範囲は7～24点であり親和性では3～12点であった。

まずTABLE 2～6の結果に基づいて、2種類の作品に対する音楽評価に性や自我状態の水準が影響及ぼすのかどうかを検討するために、性と自我水準を群間要因とし、曲の調性を群内要因とする3要因分散分析がなされた。以下にその分析結果を示す。

批判的な親 (CP) の影響：音楽評価尺度の下位尺度ごとに2 (性) × 2 (CP 水準) × 2 (曲の調性) の混合計画による3要因分散分析がなされた。その結果によれば、「明るさ」因子においては、曲の調性の主効果のみが有意であり、短調に比べ長調の曲を顕著に明るく評

価していた ($F=58.13, DF=1/65, P<.01$)。他の主効果および交互作用は有意ではなかった。

緊張性に関しても同様の分析がなされたが、曲の調性の主効果のみが有意であり、長調の曲の方がリラックス感が高く認知されていた ($F=90.03, DF=1/65, P<.01$)。

第3因子の優美さに関する同様の分析結果からは、有意な性×曲の調性の交互作用のみが見出された ($F=5.32, DF=1/65, P<.05$)。他の交互作用や主効果は有意ではなかった。

下位分析 (Tukey法、以下も同様) を行ったところ、女性群には曲の調性による有意な評価差は生じていなかったが、男性群では短調 ($M=19.08$) に比べて長調 ($M=20.16$) の曲を優美としていた。また、主として有意な性差は短調の曲の評価に生じており、男性 ($M=19.08$) に比べて女性 ($M=21.48$) の方が短調の曲を優美と認知していた。

親和性に関しては3要因の分散分析の結果、曲の調性の主効果が有意であり、長調の曲の方が親和性得点は高くなっていた。他の主効果や交互作用は有意ではなかった。

これらの事実から、保守的でまじめ、あるいは責任感や倫理観も強いといった男性的特徴を持つ批判的な親 (CP) の自我状態は音楽評価に影響を及ぼすとはいえない。むしろ、作品の曲の調性が評価に影響を与えること、優美さに関しては女性の方が曲の調性によらず高い評価を下すことが明らかになった。

養育的な親 (NP) の音楽評価への影響：同様の分散分析が行われたが、明るさの因子に関しては曲の調性の主効果のみが有意であり、長調の曲を明るいと認知していた ($F=44.23, DF=1/65, P<.01$)。

緊張性に関しては、性と曲の調性との交互作用が有意であった ($F=32.776, DF=1/65, P<.05$)。下位分析を行ったところ、長調の曲には有意な性差は生じていなかったが、短調の曲では、男性 ($M=17.92$) が女性 ($M=19.22$) よりも音楽をより緊張的であると認知していることがわかった。

TABLE 2 CP水準群および性別の音楽評価平均得点とS.D.

| 群 | 水準 | | 明るさ | | 緊張性 | | 優美さ | | 親和性 | |
|----|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| | | | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 |
| 男性 | High | Mean | 22.11 | 18.00 | 19.78 | 15.56 | 19.44 | 17.44 | 5.00 | 7.67 |
| | | S. D. | 4.46 | 1.41 | 3.87 | 2.46 | 2.70 | 2.40 | 1.66 | 1.12 |
| | Low | Mean | 23.33 | 18.87 | 21.20 | 15.07 | 20.87 | 20.73 | 5.73 | 7.27 |
| | | S. D. | 4.92 | 3.64 | 4.46 | 3.24 | 4.10 | 4.32 | 1.62 | 1.68 |
| 女性 | High | Mean | 21.35 | 18.57 | 21.13 | 16.91 | 21.17 | 21.30 | 4.83 | 7.22 |
| | | S. D. | 4.88 | 3.50 | 4.41 | 3.44 | 4.00 | 4.20 | 1.58 | 1.54 |
| | Low | Mean | 22.27 | 18.45 | 20.59 | 17.77 | 21.14 | 21.66 | 4.32 | 7.25 |
| | | S. D. | 5.03 | 3.41 | 4.39 | 3.70 | 4.10 | 4.33 | 1.57 | 1.55 |

TABLE 3 NP水準群および性別の音楽評価平均得点とS.D.

| 群 | 水準 | | 明るさ | | 緊張性 | | 優美さ | | 親和性 | |
|----|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| | | | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 |
| 男性 | High N=7 | Mean | 23.00 | 18.29 | 21.00 | 15.00 | 20.14 | 18.86 | 5.14 | 7.43 |
| | | S. D. | 2.71 | 1.70 | 1.91 | 1.53 | 2.12 | 1.35 | 1.46 | 1.13 |
| | Low N=17 | Mean | 22.82 | 18.65 | 20.53 | 15.35 | 20.41 | 19.76 | 5.59 | 7.41 |
| | | S. D. | 3.84 | 1.41 | 3.57 | 2.37 | 2.43 | 3.25 | 1.54 | 1.23 |
| 女性 | High N=19 | Mean | 21.05 | 18.63 | 20.21 | 17.68 | 20.84 | 21.71 | 4.84 | 7.05 |
| | | S. D. | 4.26 | 1.54 | 3.68 | 2.75 | 2.73 | 2.41 | 1.38 | 1.13 |
| | Low N=26 | Mean | 22.35 | 18.42 | 21.35 | 17.08 | 21.38 | 21.31 | 4.38 | 7.37 |
| | | S. D. | 3.76 | 1.53 | 2.48 | 2.59 | 2.14 | 2.66 | 1.42 | 0.93 |

優美さについての分析結果からは、女性の方が男性よりも音楽を優美であると評価していた。

親和性についての分析結果によれば、短調の曲の方が著しく親和的であると評価されていた ($F=92.74$, $DF=1/65$, $P<.01$)。

これらの結果は、CPにまつわる分析結果と同様に、陽性のストロークや母性的優しさを伴う「養育的な親」の水準の高低は音楽評価に影響を与えないことを示唆している。

大人の自我状態 (A) の音楽評価に及ぼす影響：3要因の分散分析が音楽評価尺度を構成する下位尺度の得点に基づいて実施された。まず、「明るさ」の因子に関しては、曲の調性の主効果のみが有意であり、これまでの分析と同様に、長調の曲を明るいものと評価していた ($F=43.88$, $DF=1/65$, $P<.01$)。

緊張性にかかわる分析結果によれば、曲の調性の主効果が有意 ($F=89.96$, $DF=1/65$, $P<.01$) であり短調のほうが緊張的と認知されていた。また、性と曲の調性の交互作用も有意であった ($F=5.71$, $DF=1/65$, $P<.05$)。下位分析を行ったところ、長調の曲では明確な男女差は認められなかったが、短調の曲では男性 ($M=15.35$) の方が女性 ($M=17.38$) より緊張的と認知していることがわかった。

優美さの分析結果は、男性に比べて女性の方が鑑賞曲を優美と評定していた。さらに親和性に関しては有意な性差 ($F=5.08$, $DF=1/65$, $P<.05$) と曲の調性間の

有意差 ($F=91.93$, $DF=1/65$, $P<.01$) が見出された。前者は、男性のほうが女性よりも鑑賞曲に親和性を抱いていることを意味していた。また、後者では、長調の曲のほうが短調の曲よりも高い親和性を示していた。

これらの結果を概観すると、親の自我状態 (P) と同様に大人の自我状態 (A) もまた鑑賞曲の評価に影響しないことが明らかであった。

自由な子どもの自我状態 (FC) の音楽評価への影響：「明るさ」に関する分析からは、長調の曲を短調の曲よりもより顕著に明るいと捉えることが明らかとなった ($F=41.60$, $DF=1/65$, $P<.01$)。また、性と FC 水準の間の交互作用も有意であった ($F=4.77$, $DF=1/65$, $P<.05$)。下位分析の結果、長調の曲では男性よりも女性の方が明るさを感じ、逆に短調の曲には女性がより明るさを感じていないことがわかった。

緊張性の分析でも、短調より長調の曲が有意に緊張的と認知されていた ($F=68.35$, $DF=1/65$, $P<.01$)。また、男性よりも女性が有意に鑑賞曲を緊張的と評価していることもわかった ($F=5.75$, $DF=1/65$, $P<.05$)。さらに、性と FC 水準の間の交互作用も有意であった ($F=3.89$, $DF=1/65$, $P<.05$)。

下位分析の結果、この交互作用の内容として、短調の曲では緊張性に関する有意な性差 (女性 ; $M=18.55$, 男性 : $M=18.28$) は見られないが、長調の曲に対しては、女性 ($M=19.65$) が男性 ($M=17.00$) に比べて著しいリラクセス感を示していた。

TABLE 4 A水準群および性別の音楽評価平均得点とS.D.

| 群 | 水準 | | 明るさ | | 緊張性 | | 優美さ | | 親和性 | |
|----|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| | | | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 |
| 男性 | High N=8 | Mean | 22.63 | 18.63 | 22.13 | 15.63 | 20.63 | 18.63 | 6.13 | 7.63 |
| | | S. D. | 3.38 | 1.69 | 2.70 | 2.62 | 1.77 | 1.77 | 1.46 | 1.30 |
| | Low N=16 | Mean | 23.00 | 18.50 | 19.94 | 15.06 | 20.19 | 19.94 | 5.13 | 7.31 |
| | | S. D. | 3.65 | 1.41 | 3.17 | 1.91 | 2.56 | 3.19 | 1.45 | 1.14 |
| 女性 | High N=30 | Mean | 21.30 | 18.40 | 21.03 | 17.23 | 21.00 | 21.42 | 4.63 | 7.08 |
| | | S. D. | 3.87 | 1.65 | 3.24 | 2.74 | 2.51 | 2.15 | 1.40 | 1.02 |
| | Low N=15 | Mean | 22.80 | 18.73 | 20.53 | 17.53 | 21.47 | 21.60 | 4.53 | 7.53 |
| | | S. D. | 4.69 | 2.87 | 3.94 | 3.35 | 3.59 | 3.76 | 1.45 | 1.35 |

TABLE 5 FC水準群および性別の音楽評価平均得点とS.D.

| 群 | 水準 | | 明るさ | | 緊張性 | | 優美さ | | 親和性 | |
|----|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| | | | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 |
| 男性 | High N=6 | Mean | 20.83 | 18.50 | 18.83 | 15.17 | 20.67 | 19.50 | 4.67 | 7.83 |
| | | S. D. | 3.31 | 1.52 | 3.54 | 1.17 | 2.73 | 2.59 | 2.25 | 0.98 |
| | Low N=18 | Mean | 23.56 | 18.56 | 21.28 | 15.28 | 20.22 | 19.50 | 5.72 | 7.28 |
| | | S. D. | 3.36 | 1.50 | 2.85 | 2.40 | 2.21 | 2.98 | 1.13 | 1.23 |
| 女性 | High N=23 | Mean | 22.32 | 18.68 | 21.36 | 18.00 | 20.82 | 21.20 | 4.55 | 7.18 |
| | | S. D. | 3.18 | 1.64 | 3.02 | 2.64 | 2.42 | 2.53 | 1.30 | 0.91 |
| | Low N=22 | Mean | 21.30 | 18.35 | 20.39 | 16.70 | 21.48 | 21.74 | 4.61 | 7.28 |
| | | S. D. | 4.65 | 1.40 | 3.09 | 2.55 | 2.37 | 2.58 | 1.53 | 1.14 |

TABLE 6 AC水準群および性別の音楽評価平均得点とS.D.

| 群 | 水準 | | 明るさ | | 緊張性 | | 優美さ | | 親和性 | |
|----|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|
| | | | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 | ハ長調 | 変ト短調 |
| 男性 | High N=16 | Mean | 22.69 | 18.56 | 20.50 | 15.06 | 20.81 | 20.56 | 5.44 | 7.06 |
| | | S. D. | 3.26 | 1.55 | 3.29 | 1.84 | 1.94 | 2.37 | 1.63 | 1.18 |
| | Low N=8 | Mean | 23.25 | 18.50 | 21.00 | 15.63 | 19.38 | 17.38 | 5.50 | 8.13 |
| | | S. D. | 4.13 | 1.41 | 3.02 | 2.72 | 2.77 | 2.56 | 1.31 | 0.83 |
| 女性 | High N=26 | Mean | 21.68 | 18.32 | 20.80 | 17.88 | 21.16 | 21.94 | 4.28 | 7.14 |
| | | S. D. | 4.19 | 1.49 | 3.18 | 2.76 | 2.61 | 2.35 | 1.43 | 1.02 |
| | Low N=19 | Mean | 21.95 | 18.75 | 20.95 | 16.65 | 21.15 | 20.90 | 4.95 | 7.35 |
| | | S. D. | 4.67 | 2.89 | 3.95 | 3.35 | 3.58 | 3.74 | 1.45 | 1.35 |

優美さについての分析からは、男性に比べて女性が鑑賞曲を顕著に優美であると評定していた ($F=5.05$, $DF=1/65$, $P<.05$)。親和性の分析では、短調よりも長調の曲のほうが高い親和性を示していた ($F=101.88$, $DF=1/65$, $P<.01$)。

これらの事実を概観すると、性や曲の調性といった要因の鑑賞曲評価に与える影響性は記述のものと同様である。ただ、自由な子ども (FC) の自我状態は親や大人の自我状態とは異なり、その水準は性要因との交互作用の形で、「明るさ」因子や「緊張性-リラックス感」因子の反応に影響を与えていた。

末松ら (1995) によると、FC は親の影響を受けず、快楽原理のもとに天真爛漫にふるまう点や感覚的で豊かな表現力を有している。また一般的には健康的ではあるが、過度になれば我儘とか社会的協調性を欠くとされる。末松ら (1995) によれば、FC 得点は男性よりも女性に高いことが知られているが、相対的に FC 度の高い女性であればこそ、より明るく聞こえる長調の曲にいつそうリラックスできると考えられる。このことが、上述の交互作用を生んだ一因と考えられる。

順応した子ども (AC) の自我状態が音楽評価に及ぼす影響：これまでと同様の分散分析を実施したが、その結果によれば、明るさに関しては短調よりも長調の曲を顕著に明るいと感じていた ($F=48.26$, $DF=1/65$, $P<.01$)。緊張性-リラックス感についても曲の調性の主効果だけが有意であり、長調の曲がよりリラックス

できるとされていた ($F=87.95$, $DF=1/65$, $P<.01$)。

優美さに関しては、鑑賞曲に対して女性が男性よりも有意に優美さを感じていた ($F=6.91$, $DF=1/65$, $P<.01$)。また、AC 水準の高群が低群よりも鑑賞曲を優美に評定していることもわかった ($F=4.49$, $DF=1/65$, $P<.05$)。

鑑賞曲に対する親和性は男性よりも女性に有意に強く ($F=4.81$, $DF=1/65$, $P<.05$)、短調の曲よりも長調の曲により強く感じられていた ($F=107.56$, $DF=1/65$, $P<.01$)。

社会に過剰適応的ともいえる AC 高群が低群よりも鑑賞曲を優美と認知していた。この点については、どちらかといえば本音を抑圧したまま行動するタイプとも考えられる AC 高群が、一般的に評価されるステレオタイプの反応をした結果の可能性もある。

また調性の効果が顕著であった。短調の曲に対して優美さやリラックスを感じるという本結果は、音楽に対するわが国の文化背景が影響していることを示唆している。

まとめ

本研究の一連の結果から、幾つかの事実が明らかにされた。まずは、音楽評価尺度の各祖位尺度において男性に比べて女性の方が肯定的な反応を示しているという点が指摘できる。さらに、従来から言われているように、短調の曲に比べて長調の曲が肯定的に認知されるという点も本結果を確認している。このような点は音楽教育を

実践するうえで、基礎的な資料として活かされるべきものであろう。

本研究で取り上げたパーソナリティ要因については必ずしも、全ての下位尺度において効果を持つとはいえなかった。ただ、FCやACといった子どもの自我状態にかかわる内容では、幾つかの影響性が確かめられた。

大人の自我状態は音楽評価に影響するとはいえなかったが、子どもの自我状態は部分的に音楽評価と関係することを本研究は示唆している。この点に関して詳細な検討を行うことが今後の課題といえる。

引用文献

- 波多野誼余夫 1972 音楽行動 依田 新・波多野完治・鈴木 清・波多野勤子（監修）、高橋道子・秋山道彦（編）**児童心理学の進歩** Vol. XI 113-129. 金子書房
- 星野 悦子 1987 音楽行動の発達 原野・宮本・高橋・小嶋・無藤・湯川（編）**児童心理学の進歩** Vol. XXVI 171-196 金子書房
- 林 庸司・高野真理子・柴 紀代美 1983 音楽の印象に及ぼすパーソナリティー効果 **音楽療法研究年報** 12, 26-30.
- 石橋尚子・丹野真智俊 1983 SD法による曲想の発達的研究 **日本教育心理学会第25回総会発表論文集** 200-201.
- 松井 紀和 1995 音楽療法における音楽の役割 松井紀和（編著）**音楽療法の実際－音の使い方をめぐって－**
- 桜林 仁・八木素子 1984 Cattellの16FF人格検査に現われた音楽学生の特性－音楽行動の研究 XXVI－ **日本心理学会第48回大会発表論文集** 612.
- 末松弘行・野村 忍・和田柚子 1995 **東大式エゴグラム TEG** 第2版手引き 金子書房
- 館野幸司・鈴木郁子 1981 音楽を用いた気管支喘息に対する呼吸訓練「ぜんそく音楽」 **音楽療法研究年報** 10, 1-13.
- 吉野幸男・戸田和子 1982 ことばのない就学前自閉症児に対する音楽療法の開発 **音楽療法研究年報** 11, 16-28.